[巻頭企画]

安全の基本
危険予測運転を習慣に

交通事故は、ドライバーの不注意や安全確認不足なども大きな要因となっています。事故を起こさないためには、つねに危険を予測することが重要であり、それを回避する運転が不可欠です。「危険予測運転の必要性」などは指導・監督指針の項目にもあり、事業者にはドライバーに意識づけさせることが求められています。

そこで今月号では、運転時の危険を回避するために知っておくべき「人の能力とその限界」、そして危険を予知する能力を高める「危険予知訓練（KYT）の進め方」について紹介します。

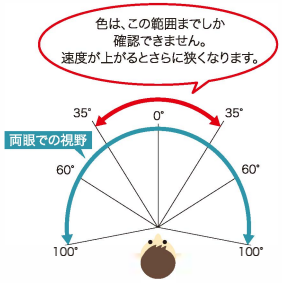
I.「目でよく見る」ことの重要性

速度が出ると視力は低下

運転に必要な情報の大半は、目から得ています。例えば、ドライバーは「信号が青に変わった」、「左折していく先の横断歩道には歩行者がいる」などを目からの情報をもとに、どのような運転行動を取るべきかを判断しています。つまり安全運転には、「目でよく見る」ことがとても重要になるのです。

また、視線を動かさずに見える範囲を視野といいます。前方を見た場合の視野は、両眼で200°くらいであり、そのうち色まで確認できるのは前方を中心に両眼で70°程度に過ぎず、それ以上は色が分かりません【図】。一般に「視力」といわれる場合、それは「静止視力」であり、車を運転している時など動いているものを見る時の視力を「動体視力」といいます。動体視力は、運転中にスピードを出せば出すほど低下するため、特に高速道路では見落としの危険性が高まり注意が必要です。

【図】両眼での視野と色の確認ができる範囲



人は錯覚を起こす

人はつねにものを正確に見ているわけではなく、錯覚を起こすことがあります。よって大切なのは、「人は錯覚するもの」と自覚して、錯覚を起こしやすい場面を理解しておくことです。下記はドライバーが錯覚を起こしやすい主なケースです。運転時は「これは錯覚かも知れない」と意識し、注意して運転しましょう。

錯覚を起こしやすいケース

- 大きい車は近くに見え、小さい車は遠くに見えます。そのため自車の右折時に二輪車が接近していても、まだ距離があると思い「自車のほうが先に行ける」と誤った判断をすることがあります。
- 道幅が同じ程度の交差点だと、自車線のほうが広く見えます。そのため自車線のほうが優先だと勘違いして、徐行や一時停止を怠ることがあります。
- 急な勾配の下り坂が緩やかな勾配に変わると、上り坂になったように感じやすいです。そのためアクセルを踏んでしまい、スピードを出し過ぎることがあります。

II. 無意識のうちに自身から出てくる危険を自覚

ドライバーになりたての頃は、緊張感を持って慎重に運転していても、慣れてくると気が緩み油断が生じやすくなります。また、過信や焦りなども安全運転を阻害する要因です。運転中、無意識のうちに出てくる危険を下記にあげました。ベテランになればなるほど、初心を大切にしてください。

ドライバーの中に潜む5つの危険

①「おごり」意識
トラックを運転する際は、高い位置から他車や歩行者を見下ろすため、無意識のうちに「威圧運転」や「嫌がらせ運転」になっている恐れがあります。つねに相手の立場に立ってハンドルを握りましょう。

②慣れによる「油断」
「毎日走っている道だから」、という油断は大敵。油断は注意力を低下させ、わき見運転につながってしまいます。わずかな緊張感の緩みが、事故を引き起こしてしまうことを意識しましょう。

③ベテランが陥る「過信」
「自分は運転が上手い」、という過信は安全運転の基本を失わせ、無謀な行為の原因に。運転に自信を持つことは大切ですが、過信は別。ベテランドライバーになっても初心を忘れないようにしましょう。

④周りが見えなくなる「焦り」
「焦り」「急ぎ」の心理に支配されると、スピードの出し過ぎ、強引な追い越し、一時停止の無視など危険な運転をしがちです。「急いでもそんなに早く到着しない」と考え、気持ちを抑えましょう。

⑤判断力を狂わす「イライラ・カッカ」
興奮した状態で運転すると、的確な判断力が失われ、他車に仕返しをしようとする行動に出がちです。「イライラ」して事故を起こしたら何にもならないと考え、つねに冷静な運転を心がけましょう。

出典：公益社団法人 全日本トラック協会「事業用トラックドライバー研修テキスト9 危険の予測および回避」

Ⅲ. 危険予知訓練（KYT）の進め方

運転中にはさまざまな危険が潜み、そうした危険が目の前に現れてから回避手段をとっても、すでに手遅れというケースは少なくありません。

交通事故を未然に防ぐためには、運転中に遭遇するさまざまな場面で、事故の原因となりうる危険要因を予測し、的確に回避することが必要です。危険を予知する能力を高める有効な訓練方法が、皆さんの会社でも取り組まれている「危険予知訓練（以下、KYT）です。ここでは改めて、KYTに対する事前準備と進め方を紹介します。

「グループ討議」によるKYTが効果的

KYTはイラストシートや写真、ドライブレコーダーに記録された映像などを見て、その場面にどのような危険が潜んでおり、その危険を回避するためにはどういった運転をすればよいのかを討議し、実践していくものです。KYTは少人数グループ形式ですすめるのが基本であり、もっとも効果的な方法だといわれています。

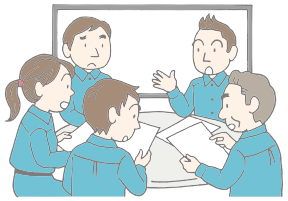
「4ラウンドKYT」が基本形

KYTの進め方として、ここでは中央労働災害防止協会が提唱している「4ラウンドKYT」を紹介します。これは「①現状把握（どのような危険が潜んでいるか）」「②本質追求（これが危険のポイント）」「③対策樹立（あなたならどうする?）」「④目標設定（私たちはこうする）」の4つのラウンドにもとづくもので、KYTの基本となる進め方です。

事前の準備として、少人数のグループ（4～8名程度）を作り、同時に意見をまとめるリーダーも決めておきます。使用素材として、交通場面を描いたイラストシートや写真、ドライブレコーダーの映像などを用意します。実施する場所は、話し声があまり外に漏れない会議室などがよいでしょう。

グループ討議では、自由に意見を発言することが重要です。自分の思ったことをどんどん発言できる雰囲気にしましょう。また、他のメンバーの意見のなかには「なるほど」と思えるアイデアやヒントがいくつもあるため、発言に耳を傾けるよう意識してください。

なお、他の意見がどのようなものであっても、一方的に否定するような発言は控えます。発言を否定されたメンバーはそれ以後、口を閉ざしてしまうおそれがあるからです。



リーダーは活発に意見が出るような雰囲気づくりも重要です。

実践「4ラウンドKYT」

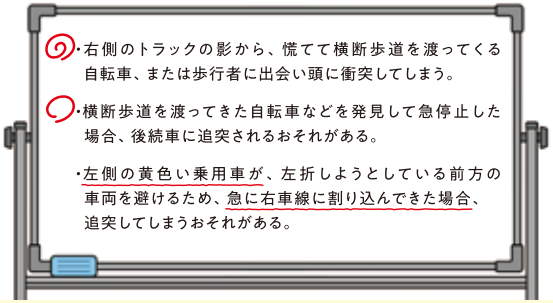
4ラウンドKYTの進め方を具体的にみていきます。“行動する前に安全を先取りするトレーニング”を重ねることで“危険を察知するコツ”を身につけていきましょう。

ラウンド1 現状把握（どのような危険が潜んでいるか）

交通状況を描いたイラストや写真を見て、その場面にどのような危険要因があるかを考え、意見を出し合います。参加者は、考えられる危険要因と現象を発表し、書記係はその発表内容をホワイトボードなどに記録します。できれば、この時点で5～7項目をあげます。

ラウンド2 本質追求（これが危険のポイント）

ラウンド1で出された“危険要因”の中から、重要な危険ポイントを絞り込んでいきます（危険要因をさらに絞り込みます）。



ラウンド3 対策樹立（あなたならどうする?）

ラウンド2で絞り込んだ危険ポイントに対して、どのような行動（改善策）をとるかを考え、それをホワイトボードに書き出します。改善策は、自分たちが“実施可能な”ものだけとします。

ラウンド4 目標設定（私たちはこうする）

ラウンド3で出された対策のうち、すぐ実施する重点実施項目を全員の合意で1項目選び、それを行動目標に設定します。
設定された行動目標は、最後に全員で「○○（行動目標）、ヨシ!」とリーダーの号令で3回指差唱和し、KYTを終了します。

危険予知トレーニングは決して難しいものではありません。しかも、定着すれば大きな安全効果を生み出します。すでに活用されている事業者の皆さんも、改めて進め方を振り返り、KYTを一層効果的なものにしてください。

出典：公益社団法人 全日本トラック協会「事業用トラックドライバー研修テキスト9 危険の予測および回避」
「やってみましょう 危険予知トレーニング -職場の労災事故防止対策-」